

<清澄白河・大正記念館と白河>

～白河楽翁と渋沢栄一との関係からみた白河と白中・白高の位置付け～

東京の住居表示に「江東区白河一丁目～」が在り、地下鉄半蔵門線に「清澄白河駅」が在り、楽翁公の菩提寺である「靈巖寺」、更には清澄庭園内に「大正記念館」が存在する。渋沢は、自分の人生に影響のあった人物は15代将軍慶喜と松平定信である、と述べている。渋沢とそのブレーンにより、100年前からの白河、そして白河中学にも深い関わりがある。

* 明治28(1892)年：55才の渋沢は、東北線で白河通過中の車窓から次のように詠んでいる。「あきかぜのむかしの関の白河をみるまにすぐるまかね路の旅」

* 大正5(1916)年5月11日 白河町長と2人の町民が北区王子・飛鳥山の渋沢邸を訪問。76才になっていた渋沢は、定信を祭神とする南湖神社創建の支援を快諾。

* 大正5年8月23日 渋沢が逗留していた塩原温泉に白河町民が押しかける。

(次への約5年間は、白河町は神社設立認可に向けて渋沢と連携して大運動を展開)

* 大正10(1920)年5月5日 南湖神社地鎮祭。岩崎小弥太・岩崎久弥・三井八郎右衛門・団琢磨・益田孝・大倉喜八郎 服部金太郎 浅野総一郎・古河虎之助・安田善治郎ほか日本を牽引する多くの人達が「白河ガンバレ!」と声援・寄付をする。この時、渋沢81才。

* 大正11(1921)年6月12日～14日 本殿が完成して鎮座祭。町内パレード。白河以北一山百文のうっぶんを晴らす。西白河郡内の多くの人達が沿道を埋め渋沢と顔を会わせた。

* 大正14(1925)年5月2日 85才になっていた渋沢は、白河中学の創立を大変喜び、東京帝国大学教授・三上参次博士を、自分の名代として白河中学に講師派遣。

* 昭和4(1929)年5月27日 渋沢が会長として「楽翁公遺徳顕彰会」(役員：東京府知事・東京市長・堀切善次郎、三井八郎右衛門、三上参次、他)を財団法人として設立。この時、渋沢89才。この顕彰会は、現在、(公財)東京都慰霊協会に引き継がれている。

* 昭和4年6月14日 深川・靈巖寺で楽翁公の100回忌法要。3日間にわたり東京・丸の内「白河楽翁公展覧会」を開催。来場者やマスコミで東京は白河一色。全国区となる。

* 昭和6(1931)年6月13日 清澄白河・大正記念館に於いて、「白河楽翁公記念講演会」を開催。渋沢は、敬愛する白河楽翁公の、生涯最後の講演会をこの地で開催し、5ヶ月後に91才の生涯を閉じる。この講演から3ヶ月後に日本は満州事変へと突入し、太平洋戦争へと突き進んで行く。
(文責：高17回 庄田育夫)

<ナビゲーター略歴>

庄田育夫（しょうだ いくお）

白河市七番町に生まれる。白二小・白二中

高 17 回・昭和 40 年 白河高校商業科卒

中央信託銀行（現三井住友信託銀行）参与

龍門社（公益財団法人渋沢栄一記念財団）会員